



『医学天正記』を中心に”

福田 安典(愛媛大学)

9/29(金)

⑩ 9:30～11:30 総括討論

以上の報告者以外に、ジェイソン・ウェッブ准教授(東京大学東洋文化研究所)が全日程に参加し、討議の活発化に重要な役割を果たした。主な参加者が日本学の研究者であったため、使用言語は主に日本語で行われ、時に英語による通訳で参会者の理解を助けた。

次に、各報告の概要をあげる。

- ① ゴーブル報告は、曲直瀬道三・玄朔とほぼ同時代の山科言継・言経の日記に見られる医療記録の検討をとおして、もともと曲直瀬玄朔の診療日記であったと考えられる古記録から、医案『医学天正記』という独立した著述が成立する過程についての考察を行った。
- ② ドロット報告は、曲直瀬道三が『啓迪集』において老人門を独立させたことに着目し、従来の‘養生’が権力者に対する健康管理の提案であったものから、子が老いた親の健康管理を行うためという著述目的の変化を指摘して、そこに近世的な庶民の台頭と孝養を重んずる儒教への転換を見る。
- ③ 町報告は、房中養生書『黄素妙論』について、道三の著作であることを証する資料として『当流医之源委』をあげ、房中書の歴史を概観しつつ『黄素妙論』が典拠とした明・嘉靖刊『素女妙論』について紹介し、『黄素妙論』の著者を道三とすれば、道三の明刊医書の高い吸収力の証左といえるとする。
- ④ 小曾戸報告は、医書出版萌芽期の状況や入明した僧侶・医師の存在を道三以前の状況としてあげ、それをうけた道三『啓迪集』には嘉靖以前の明刊医書からの引用が多数みられることを指摘し、続く玄朔の時代には古活字版医書が数多く出版されて整版本の時代に移行

するとして、印刷文化の面から16～17世紀の日本の医学状況を幅広くとらえた。

- ⑤ 町報告は、『杏雨所蔵医家肖像集』に収められた絵画資料と『今大路家記』等の記録を主な材料として、服飾と制度のかかわりの視点から江戸期を中心とした日本医家の風俗を考察した。
- ⑥ 福田報告は、日本近世文学研究の立場から、従来の医学史研究では殆ど取り上げられることがなかった『戯言養記集』『醒睡笑』『信長記』等に収められた道三・玄朔の講釈や診脈等に関する数々の説話を取り上げて、道三・玄朔の事績の中から同時代人の印象に残ったものをおして、近世の医療文化における曲直瀬道三の意義を考察した。
- ⑦ 池田報告は、道三が従来知られている茶人としての側面以外に、名香「蘭奢待」を所持し、建部隆勝と親交をもった香人であったことを紹介して、諸芸に通じた16世紀文化人としての道三の一面を指摘した。
- ⑧ 町報告は、道三の漢文資料をどのように訓読するかを検討する実例として、道三自筆にかかる道三肖像画賛を玄朔の訓点資料に従って訓読し、また『啓迪集』策彦周良題辞を道三自筆本に従って訓読した。
- ⑨ 福田報告は、『医学天正記』から玄朔が法眼に任ぜられた天正10年の陽光院霍乱を治療した記事を取り上げ、本復祝いの演能番付まで記していることを紹介し、同書の記録性に関する問題点を考察した。

以上の4日間に亘る報告とそれに対する参加者の活発な討論によって、曲直瀬道三・玄朔をとおして16～17世紀における日本医学史の諸問題に関する共通理解が深まった。そこで、ワークショップ報告者・参加者を中心に報告書を作成して、本ワークショップの成果を公開することとした。